

日本におけるマルクス主義術語の形成 及び中国語訳への影響

——堺利彦・幸徳秋水訳『共産党宣言』を中心に——

劉 孟 洋・姜 雨 婷

キーワード：『共産党宣言』、マルクス主義術語、堺利彦・幸徳秋水訳本、中国語訳、語彙交流

はじめに

『共産党宣言』（以下、『宣言』と略す）はマルクスとエンゲルスが起草した、科学的共産主義の最初の綱領的文書であり、尚且つ世界的に普及しているマルクス主義の基本文献である。1906年、堺利彦、幸徳秋水により翻訳された『宣言』（以下、堺・幸徳訳本）は日本初の全文訳であり、東アジアの『宣言』翻訳史において、その訳本は後の中国語訳の底本となった。故に堺・幸徳訳本は日本語におけるマルクス主義術語の形成ないし中日術語交流の研究において、重要な資料である。これまで、堺・幸徳訳本における術語を対象とした研究は比較的多く、宮島達夫（1979）、石川禎浩（1992）、陳力衛（2008）、大村泉（2008、2009）、玉岡敦（2008、2009）をはじめ、術語の変遷或いは中国語訳への影響を中心に考察が行われてきた。しかし、堺・幸徳訳本で使われてる術語は、いつ頃、どのように創出されていたか、その経緯について言及された研究は多くない。したがって、本稿では、堺・幸徳訳本を対象に、語彙史及びに中日語彙交流史の視点から、近代日本におけるマルクス主義術語の形成を考察し、それを踏まえた上で中国語訳への影響をめぐって考察を試みる。

一、『共産党宣言』日本語訳のあゆみ

1.1 『共産党宣言』の早期翻訳

日本では明治維新以降、西洋の政治思想が徐々に輸入され始めた。こうした背景の中、19世紀70年代頃、明六社のメンバーである加藤弘之と西周が社会主義、共産主義に関する啓蒙的な知識を紹介した。加藤は1870年刊行の『真政大意』において社会主義、共産主義を

それぞれ「ソシヤリスト」、「コムミュニス」と音訳したのに対し¹⁾、西周は 1872 年に活字した『百学連環』で、これらの学説をそれぞれ「会社之説 (Socialism)」、「通有之説 (Communism)」と意識していた²⁾。翻訳方式は異なるものの、明六社の啓蒙思想家らの社会主義、共産主義学説に対する態度は批判的なものであった³⁾。

19 世紀 80 年代に入ると、自由民権運動が高潮に達した。こうした背景の中、小崎弘道、中江兆民、宍戸義知、徳富蘇峰等の学者らが、『政理叢談』、『国民之友』、『六合雑誌』等の社会学雑誌を以て、社会主義、共産主義思想を積極的に宣伝し始め、マルクスの基本思想、生い立ち及び『共産党宣言』の主な理論も断片的な形で紹介した。

19 世紀 90 年代以降、資本階級の労働運動が高潮に達した。こうした背景の中、深井英五、田島錦治、福井準造、村井知至、片山潜、堺利彦、幸徳秋水等の社会主義者が次々と登場し、マルクス主義を研究対象とした著書が次々と活字された。これらの社会主義者の著書では、『宣言』の主な理論について紹介されたほか、『宣言』第 2 章の 10 条からなる綱領部分や第 4 章の末文「...万国のプロレタリア、団結せよ」等の有名な章句が翻訳の形で引用されていた。

1.2 堺・幸徳訳本（1906）の成立

19 世紀から 20 世紀へ移って間もなく、『宣言』日本語訳初版本が堺利彦、幸徳秋水の共訳によって誕生し、1906 年 3 月創刊の『社会主義研究』第 1 号において掲載された。厳密に言えば、堺利彦・幸徳秋水共訳本は 1904 年 11 月 13 日発行の『平民新聞』第 53 号において既に掲載されているが、同訳本では『宣言』第 3 章の訳文が欠けているため、『社会主義研究』において掲載された 1906 年版の訳本こそ正式な日本語訳初版本である。1904 年版の訳本は『平民新聞』創刊一周年を記念して、サミュエル・ムーア (Samuel Moore) 訳の英語版訳本を底本にして翻訳されたものであり、巻頭に訳者の序文が付けられている。刊行と同時に、新聞紙条例により秩序壊乱に当たるとして発売を禁止され、訳者及び発行人西川光次郎は起訴され、同時期の思想家の間で広く読まれることはなかった。1906 年刊行の全訳本は 1904 年版訳文を基に第 3 章の訳文を追加したものである。第 3 章の翻訳は堺利彦自ら担当したものであるが、訳本全体は「堺利彦・幸徳秋水共訳」と記されている。

二、堺・幸徳訳本におけるマルクス主義術語

堺と幸徳が『宣言』を全訳し始めた 20 世紀の初頭、日本ではマルクス主義が紹介されて

約 30 年もの歳月が経っていた。堺・幸徳訳本では数多くのマルクス主義術語が使われていたが、これらの術語はいつ頃、どのように創出されていたのか、その経緯を探る必要がある。本稿では堺・幸徳訳本（1906）を対象に、そこから合計 150 語のマルクス主義術語を抽出した⁴⁰。この 150 語をめぐって、日本におけるマルクス主義術語の生成を探る。

2.1 堺・幸徳訳本以前にみられた術語

堺・幸徳訳本で用いられてる術語のうち、堺・幸徳訳本以前にみられたものは 99 語あり、全語数の 66% を占めている。マルクス主義の学説が断片的に日本に紹介されてから、堺・幸徳訳本が刊行されるまでの約 30 年もの間に、数多くのマルクス主義の基本的概念が学界に翻訳されていた。これらの術語は創出と交替を経て、20 世紀の初頭、社会主義、マルクス主義関連文献で広まり、堺・幸徳訳本でもたくさん受け継がれていた。本研究より判明したマルクス主義術語のうち、日本の早期社会主義関連文献で形成したものを語の形態別に分けると次の通りである。

二字漢語：

財産、衝突、道德、地代、闘争、独占、法律、分業、革命、工業、関係、貴族、国家、貨幣、機械、交換、階級、解放、経済、競争、恐慌、労働、利害、利益、賃銀、領主、掠奪、矛盾、民主、目的、農夫、農民、農奴、農業、奴隷、批評、平等、人口、商品、商業、社会、生産、市場、市民、思想、文明、物質、消費、衣食、運動、原料、哲学、真理、争闘、政党、政治、専制、資本、自由、宗教

多字漢語：

共産党、労働者、農奴制、生産力、委員会、無政府、自由民、生産物、殖民地、封建社会、封建制度、共産主義、労働階級、労働時間、平均価格、社会主義、自由競争、自由貿易、自由主義、階級闘争、共産社会、階級争闘、経済関係、賃銀労働、生産方法、生産過多、生産機関、生産機械、私有財産、同業組合、共産党宣言、同業組合員

短語：

社会的労働、共産的革命、交換の機関、農業的革命、商業上の恐慌、社会的関係、社会的生産

全般的にみて、二字漢語と多字漢語が多く、短語形式のものも幾多か存在していた。二字漢語の方はマルクス主義における専門的な術語というよりかは、一般概念を表す語であるのに対し、多字漢語と短語の術語は主にマルクス哲学、政治経済学における専門的な術語とし

て使われるものが多かった⁹⁾。

この時期のマルクス主義術語の創出方法は、近代日本語における新漢語の生成方法と基本的に同じであった。まず、二字漢語の方は、基本的にはその語の基本義をベースとした語義の拡張或いは転用によって生じたものである。例えば、「闘争」、「争闘」の2語の基本義は「相手に勝つために争う」であったが、堺・幸徳訳本をはじめとするマルクス主義関連の文献では、「社会主義や労働運動などで権利や要求を獲得するために争うこと」という意味へと拡張しており、主に「階級闘争」のことを指している。多字漢語の方は、主に二字漢語を語基として、その漢語或いは接辞との結合により創出された派生語或いは複合語である。これらの術語では、「生産」、「闘争」、「労働」、「階級」等、先述の二字漢語の術語を語基として造られたものが多数存在している。短語の術語の方は、主に「○+の+○」或は「○+的+○」の形で訳されたものである。このうち、「の」は連体修飾的な文法機能を持つ格助詞であり、「交換の機関」、「商業上の恐慌」のように、体言の「機関」、「恐慌」を修飾している。「的」の方は近代以降、英語の接尾辞“-tic”を翻訳するために創出された接尾辞であり、「…の性質」的な意味を表す。「○+の+○」形式も「○+的+○」形式も、この時期の日本語では抽象的な概念を表すのに用いられることが多く、政治、経済、哲学、社会学関連文献でよくみられた。

このように、日本早期の学者らは、マルクス主義の学説を断片的に紹介し始めた頃から、上述の創出方法を以て、様々な形態のマルクス主義術語を創出してきており、それらの術語の多くが堺・幸徳訳本に受け継がれた。

まず、二字漢語の「闘争」と「争闘」を例にみたところ、2語とも漢籍語であり、堺・幸徳訳本では英語版訳本の原語“Struggle”の訳語として転用されており、主に資本階級と労働階級の間の争いを指していた。本稿の調査によれば、「闘争」、「争闘」の2語は、19世紀末頃に出版された石谷斎蔵の『社会党瑣聞』（1891）において、既に資本階級と労働階級の間の争いを表す術語として転用されていた。

予か、前章論した如く資本家と労働者との争闘相撃とると…

石谷斎蔵（1891）p65

其不完全なると、欧米諸国の資本家労働者は飢飽寒煖の間で宛然対立して相闘争すると其し貧富の関係経る同盟罷工となりて…

石谷斎蔵（1891）p28

20世紀初頭に出版された社会主義関連の著書では、作品ごとに術語が異なっており、「闘

争」が使われたものもあれば、「争闘」が使われたものもあった。

富豪と貧民、財主と労働者、肉食者と窮民の大争闘は、あの手段に依りて、結局するより外なし… 久松義典（1901）p23

固より此共産党即ちカール、マルクスの『共産主義の宣言』を政綱とするのは政党は唯闘争する「プロレタリアート」の一部を成すに過ぎざるなり。

神戸正雄（1903）p99

このように、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、「争闘」と「闘争」は同時に使われてることが多く、こうした背景の中、堺・幸徳訳本でもこの 2 語が“Struggle”の訳語として併用されていた。

社会主義的紳士は、近世社会の状態より生ずる一切の利益を取り、而して必然之より生ずる争闘と危険とを免れんと欲す。

堺利彦・幸徳秋水訳（1906）p31

而して斯くの如く同性質なる数多の地方的闘争を集中して、一国的なる一大階級闘争と為さんには、正に此触接を必要としたりしなり

堺利彦・幸徳秋水訳（1906）p14

次に、多字漢語の「労働組合」を例にみたところ、堺・幸徳訳本では英語版訳本の原語“Labor Union”の訳語として使われていた。本稿の調査によれば、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて出版されたマルクス主義関連の著作物では、この概念を表す術語が頻繁にみられ、西川光次郎『カール・マルクス』（1899）、村井知至『社会主義』（1899）をはじめ、数々の出版物において「労働組合」と訳されていた。

次に英国に中等階級主義の労働組合起り、仏蘭西に再び革命の機運動を始め、又独乙にも労働者の独立政党組織され始めしかば…

西川光次郎（1899）p29

蓋し労働組合は労働者の権利を保護し、且つ之を伸暢せんが為に起れり、即ち詳言せば、労働者が資本家より残虐なる待遇を受け、唯當々として牛馬の如く働かしめらるるを慨し、退ひては、自家の権利を保護し、進んては、其権利を主張し…

村井知至（1899）p113

このように、「労働組合」は当時の日本の社会主義学者の間で広く使われており、こうした背景の中、堺・幸徳訳本でも受け継がれ、当訳本では底本の英語版訳本における“Labor

Union”の訳語として使われた。

又間断なき機械の進歩は彼等の生活をして愈々益益不安ならしめ、次で個々の労働者と個々の紳士との間の衝突は、漸々二階級間の衝突たるの性質を帯びしむ。是に於て、労働者は初めて団結（労働組合）を作つて紳士に対抗す。

堺利彦・幸徳秋水訳（1906）p14

続いて、短語の「共産的革命」を例にみたところ、堺・幸徳訳本では英語版訳本の原語“Communitic revolution”の訳語として使われており、現代訳の「共産主義革命」に相当するものであった。本稿の調査によれば、日本でこの概念が訳されたのは19世紀末頃であり、深井英五の『現時之社会主義』（1893）、福井準造の『近世社会主義』（1899）をはじめ、いずれも短語「共産的革命」の形で訳されていた。

宣言書の結尾に曰く「共産党は敢て其意見と目的とを隠蔽するとをせず。彼等の目的を達するが為に、社会の現制を激変するの必要なるとを告白す。有権階級として共産的革命に戦慄せしめよ。労働者は革命により、桎梏を失て世界を得るし、総ての国の労働者よ、結合せよ」。

深井英五（1893）p87

同盟は其意見及び目的を隠蔽するを望まず、故と吾人は公言す、吾人の目的を貫徹せんが為には、又現社会の組織に向て、一大改革を加ふるの要わることを、治者の階級は、此共産的革命を戦慄すべし

福井準造（1899）p189

深井（1893）、福井（1899）の2作では共に『共産党宣言』の文末の段落が翻訳の形で引用されており、上記の用例はいずれもその訳文からきたものであった。このように、日本では19世紀末の頃から、“Communitic revolution”の表す概念を短語「共産的革命」の形で訳しており、このような訳し方は堺・幸徳訳本にも受け継がれた。

権力階級をして共産的革命の前に戦慄せしめよ。労働者の失ふべき所は唯だ鉄鎖のみ。而して其の得る所は全世界なり。

堺利彦・幸徳秋水訳（1906）p35

2.2 堺・幸徳訳本で初出とみられる術語

堺・幸徳訳本で用いられてる術語のうち、堺・幸徳訳本ではじめて使用されたものは 51

語あり、全語数の34%を占めている。明治期に生成されたマルクス術語の多くは、堺・幸徳訳本に至って、まだ定着されておらず、各文献資料ごとに異なっていた。堺・幸徳訳本でもマルクス主義の基本的概念を如何に翻訳するか、様々な工夫がなされていた。本稿により判明したマルクス主義術語のうち、堺・幸徳訳本で初出とみられるものを語の形態別に分けると次の通りである。

二字漢語：

紳士、平民

多字漢語：

農奴制、理想家、平民党、紳士閥、小紳士、財産関係、階級対立、禁欲主義、第三級団、工場制度、工場組織、経済事情、压制階級、労働器械、労働組合、平民革命、平民階級、平民運動、権力階級、紳士階級、紳士社会、小紳士閥、治者階級、中間階級、被压制階級、社会生産力、紳士閥国家、小紳士階級、真社会主義、封建社会主義、空想社会主義、紳士社会主義、基督教社会主義、小紳士社会主義

短語：

貨幣の経済、交換の価格、経済的要件、精神的生産、労働の器具、労働階級の革命、累進率の所得税、民主的社会主義者、社会的自覚、紳士の革命、生産の関係、生産の器具、危険なる階級、物質的生産、永久の真理、政治的闘争

訳者の堺、幸徳によるこれらの術語の創出方法は、近代日本語における新漢語の生成方法とほぼ同じであるが、多くは早期の社会主義関連文献で生成された術語と語形が微妙に或いは完全に異なっており、訳者ならではの認知により創出されたものだと考えられる。

「紳士」、「平民」を例にみたところ、これらの2語はいずれも漢籍語であり、従来の語義からして、前者は「上流社会の人、財産、地位のある人」、後者は「官位のない民、庶民」の意味を表すものであったが、堺・幸徳訳本において、前者は“Bourgeois”、後者は“Proletarian”の訳語として転用されており、それぞれ現代訳の「ブルジョア」、「プロレタリア」に相当するものであった。

平民の原語はプロロタリアン（Proletarian）にして之を労働者若くば労働階級と訳するもの可能なり。

堺利彦・幸徳秋水訳（1906）p6

訳者云、紳士の原語はブルジョア（Bourgeois）にして、時に富豪と訳され、時に豪

族と訳され、又多く資本家と訳されるるもの。

堺利彦・幸徳秋水訳（1906）p6

上記の例文は、いずれも堺・幸徳訳本における第一章の題目「紳士与平民」の後に付加された注釈からきたものである。その注釈から分かるように、「平民」は“Proletarian”の訳語であり、「労働者」と訳すことも可能であり、「紳士」は“Bourgeois”の訳語であり、「資本家」と訳すことも可能であった。しかし、それまでの社会主義関連の文献では「労働者」、「資本家」が使われていたのに、堺・幸徳訳本（1906）ではわざわざ在来語である「紳士」と「平民」をそれぞれ訳語として転用していた。その理由に関して、まず、訳者らからみた「紳士」は私利的にして俗悪なる一般上流社会の人物を表現する言葉であり⁶⁾、“Bourgeois”の私利を貪るという本質を表すのに適切な表現であったからだと考えられる。そして、「紳士」が訳語として使われた以上、その対極語の「労働者」は修辞学的には対応しにくく、訳者らによる種々の推敲を経て、最終的「平民」が選ばれたものと考えられる。

次に、多字漢語の「労働器械」と短語の「労働の器具」を例にみたところ、堺・幸徳訳本では、両語とも英訳本の“Labor instrument”から訳されたものであり、「労働過程において、人間が労働の対象に対して働きかけるために手段として利用するもののこと」を意味しており、現代訳の「労働手段」に相当するものである。本稿の調査によれば、日本では19世紀80年代の頃から20世紀の初頭にかけて、“Labor instrument”の表す概念が様々な形で翻訳されていた。例えば、宍戸義知訳の『古今社会党沿革説』（1882）では「労作器具」、田島錦治の『日本現時之社会問題』（1897）では「労働的機械」、福井準造の『近世社会主義』（1899）では「労働の器械」、気賀勘重解説の『フィリップヴィッチ氏経済原論』（1903）では「労働用具」とそれぞれ訳されていた。

就中公会ハ機械ノ疑問ニ関シテ諸機器ハ他百般ノ労作器具ト同シク労役者ニ属スベキトヲ宣白ス...

宍戸義知訳（1882）p220

但し機械の中に就て势力的機械（又発動機）と称し、勢力を発して人畜の腕力に代ふべきもの（例へば蒸気機関の如き）に在りては、概して人間の労苦を減ずるの利ありと雖も、労働的機械、即ち労働者の熟練に代ふるものを（例へば紡績織物機械の如き）に在りては然らず...

田島錦治（1897）p19

労働の器械は一階級者の特有に帰し、是に依りて自由労働者の階級は、賃銀の鉄則を

利用して余剰の利潤を強奪し次第に財産を貯蓄するが如く…

福井準造（1899）p256

又労働者は生計資料及労働用具を有すると稀なれば之を資本家に仰ぐものなるに…

気賀勘重解説（1903）p322

このように、“Labor instrument” の概念を表す訳語は文献ごとに微妙に異なっていたことから、当時の学者らの間では、この概念に対する認知において微妙に差があったものとみられる。こうした状況は堺・幸徳訳本でも反映されており、当訳本では四字漢語からなる「労働器械」と短語からなる「労働の器具」の2形式で訳されてる上に、2語とも既出のどの訳語とも語形が微妙に異なっていた。これは、この概念に対する訳者らならではの認知によって生じたものと考えられる。

夫れ一面に於ては、近世産業の結果として、総て平民の家族関係は寸断せられ、其兒女は単に一個の商品、労働器械と化せらるるの益々甚しきの時に於て、彼紳士等が家族及び教育に就て喋々し、以て一時の人気を取らんとするを見る。

堺利彦・幸徳秋水訳（1906）p22

年齢の差と男女の差とは、労働階級に取りては、既に何等顕著なる社会的高架の異同を示さず。彼等は皆只労働の器具にして、其年齢と男女とに従ひ、其費用の差を生ずるのみ。

堺利彦・幸徳秋水訳（1906）p13

三、堺・幸徳訳本から中国語訳への影響

堺・幸徳訳本は日本のマルクス主義伝播史における里程標的な資料であるだけでなく、中国のマルクス主義伝播にも大きな影響をもたらした。『宣言』に関しては、19世紀の末頃、既に中国の洋学資料で紹介されていたが、断片的なもののみであった。1908年、『共産党宣言』の第一章が初めて留日学生の手により翻訳され、それは堺・幸徳訳本（1906）を底本にしたものである。1920年、中国の早期共産主義学者である陳望道は堺・幸徳訳本（1906）を底本に『宣言』を翻訳し、中国最初の『宣言』全訳本が誕生した。語彙史の面からみて、陳望道訳本（以下、陳訳本と略す）で使われてるマルクス主義術語は、堺・幸徳訳本と密接な関係を持ち、そこから受けた影響が大きいと考えられる。したがって、堺・幸徳訳本にあるマルクス主義術語が、中国語訳への影響について探ることにした。

3.1 堺・幸徳訳本から受け継いだ術語

陳訳本は堺・幸徳訳本を底本に翻訳されたものである、二つの訳本を照合したところ、陳訳本では合計 155 語のマルクス主義術語が使われており⁷⁾、そのうちの 94 語は、堺・幸徳訳本の原語と語形上まったく一致するものであり、日本語の底本から受け継いだものと考えられる。また、これら直接底本の影響を受けた術語は形態別でみると次の通りである。

二字漢語：

財産、道德、独占、法律、贵族、国家、货币、交换、解放、竞争、恐慌、利害、利益、领主、掠夺、矛盾、农夫、农民、农奴、农业、奴隶、批评、平等、人口、商品、商业、市场、市民、文明、物质、消费、衣食、哲学、争斗、政党、政治、真理、专制、资本、宗教、冲突、革命、工业、关系、阶级、经济、劳动、民主、目的、社会、生产、思想、原料、运动、自由

多字漢語：

共产党、劳动者、理想家、农奴制、生产力、生产物、委员会、无政府、殖民地、自由民、财产关系、封建社会、封建制度、共产社会、共产主义、阶级争斗、禁欲主义、经济关系、劳动阶级、劳动时间、平均价格、权力阶级、社会主义、生产方法、生产机关、私有财产、中间阶级、自由竞争、自由贸易、自由主义、共产党宣言、社会生产力、真社会主义、空想社会主义、基督教社会主义

短語：

共产的革命、社会的劳动、社会的自觉、物质的生产

これらの術語が陳訳本で使われた経緯に関しては、底本からの直接的な影響が大きいものと考えられるが、術語の由来からみて、これらの多くは堺・幸徳訳本以前の早期社会主義文献で生成されたものであった⁸⁾。

“生产机关”を例にみたところ、当漢語の原語である「生産機關」は堺・幸徳訳本が刊行される前から創出された術語であり、堺・幸徳訳本では、英語版訳本の原語“Means of production”の訳語として使われており、労働と結合して生産物を生み出すために使われる物的要素を指している。本稿の調査によれば、日本でこの概念が訳され始めたのは 19 世紀末頃からであり、田島錦治の『日本現時之社会問題』（1897）、村井知至の『社会主義』（1899）では共に「生産機關」と訳されていた。

Saint・Simon（サンシモン）派の真正の希望は土地資本の如き総般の生産機關を共有の

下に置き、各人は自己の能力に応じて適宜に此の生産機関を使用し、其の成就したる仕事の多寡大小に比例して報酬を與へんとするに在るのみ。

田島錦治（1897）p104

社会主義は工業社会に於て新に計画せらるる社会制度にして、偉大なる物質的生産機関に於ける私有財産を廃し、之に代へて合同資本を作り、更に各人協同して生産を取り行ふべきを唱へ…。

村井知至（1899）p23

田島（1897）と村井（1899）以降、20世紀の初頭に出版された社会主義関連の出版物でも、「生産機関」が頻繁に用いられていた。このように、当時の社会主義者の間で広く使われていた「生産機関」は、堺・幸徳訳本でも受け継がれ、更には堺・幸徳訳本から陳訳本へと当漢語が伝わっていった。

一切の資本を紳士閥より奪取し、一切の生産機関を国家の手、即ち当時の権力階級を成せる平民の手に集中し、而して能ふ限り速に生産力の全体を増加すべし。

堺利彦・幸徳秋水訳（1906）p34

このように、日本の早期社会主義で生成され、尚且つ堺・幸徳訳本に受け継がれた術語ほど、陳訳本への直接的な影響は大きいものであった。

3.2 堺・幸徳訳本をベースに改造した術語

二訳本の照合を通して、陳訳本にある術語が語形上、堺・幸徳訳本の術語とかなり似てゐるものは52語ある。これらの術語は堺・幸徳訳本をベースに改造したものであり、いわゆる間接的にその影響を受けたものと考えられる。形式別でみると、以下の通りである。（括弧内は堺・幸徳訳本における原語）

二字漢語：

地租（地代）、分工（分業）、工銀（賃銀）、工资（賃銀）、行东（同業組合員）、机器（機械）

多字漢語：

生产品（生産物）、工银劳动（賃銀労働）、交换价值（交換の価格）、交换机关（交換の機関）、劳动联合（労働組合）、生产工具（生産の器具）、手工工业（工場制度）、统治阶级（治者階級）、土地革命（農業的革命）、有产社会（紳士社会）、工业组织（工場制度）、

階級対抗（階級対立）、経済条件（経済的要件）、経済状況（経済事情）、生産関係（生産の關係）、社会关系（社会的關係）、生産過度（生産過多）、生産器具（生産機械）、同行組合（同業組合）、危険階級（危険なる階級）、压迫階級（压制階級）、永久真理（永久の真理）、資本社会（紳士社会）、被压迫階級（被压制階級）、第三階級団（第三級団）、小資本階級（小紳士閥/小紳士階級）、資本家社会（紳士社会）、手工工場組織（工場制度の製造業）、无产阶级運動（平民運動）、有产階級革命（紳士の革命）、有产階級国家（紳士閥国家）、有产階級社会（紳士社会）、民主社会主義者（民主的社会主義者）、資本家社会主義（紳士社会主義）、小資本家社会主義（小紳士社会主義）

短語：

封建的社会主义（封建社会主義）、貨幣底經濟（貨幣の經濟）、劳动底器具（労働機械）、劳动底工具（労働の器具）、劳动階級の革命（労働階級の革命）、累進率の所得税（累進率の所得税）、商業上の恐慌（商業上の恐慌）、社会底生産（社会的生産）、无产阶级の革命（平民革命）、知識の生産（精神的生産）、政治上的斗争（政治的闘争）

“生産過度”を例にみたところ、当漢語の原語である「生産過多」は堺・幸徳訳本で創出された術語であり、英訳本の“Over Production”の訳語として創出され、「資本主義社会で生産された商品の量が社会の購買力を遙かに上回っている現象」を表している。語構成の面からみて、堺・幸徳訳本の「生産過剰」はマルクス主義術語として転用された二字漢語の「生産」を前語基として造られており、後語基の部分には二字漢語の「過多」が充てられていた。しかし、陳望道訳本では、後語基「過多」の部分のみ、「過度」へ置き換えられていた。

又是等の恐慌に際しては、上代に在りては実に不可思議の現象たるべき一種の流行病＝即ち生産過多の疫病を生ず。

堺利彦・幸徳秋水訳（1906）pp11-12

在这种恐慌里面，发生一种古代梦想不到的流行病——就是生産過度的流行病。

陳望道訳（1920）p12

続いて、“劳动底工具”を例にみたところ、当短語の原語である「労働の器具」も堺・幸徳訳本で創出された術語であり⁹⁾、英訳本の“Labor Instrument”の訳語として創出され、「労働過程において、人間が労働の対象に対して働きかけるために手段として利用するもののこと」を表している。語構成の面からみて、原語の「労働の器具」は「○+の+○」形式になっており、連体修飾的な文法機能を持つ格助詞「の」の前に来る修飾体部分にはマルクス

主義術語として転用された二字漢語の「労働」が充てられており、「の」の後ろに来る被修飾体部分には「器具」が充てられていた。一方で、陳望道がこの原語を翻訳した際は、格助詞「の」の部分で“底”へと改訳した上で、被修飾体部分の「器具」を“工具”へと改訳した。

…それだけ近世産業は発達したるものにして、従つて亦男子の労働は漸々女子の取つて代る所となる。年齢の差と男女の差とは、労働階級に取りては、既に何等顕著なる社会的効果の異同を示さず。彼等は皆只労働の器具にして、其年齢と男女とに従ひ、其費用の差を生ずるのみ。

堺利彦・幸徳秋水訳（1906）p13

近代工业越发达，手工里的技术和腕力渐归无用，男子底劳动越发被女子占去。年龄和男女底差别，在劳动阶级，没有什么社会效果上的分别。他们同是劳动底工具，不过费用一层因着年龄和男女有多寡罢了。

陳望道訳（1920）p14

全般的にみて、これらの 52 語と対応している原語のうち、堺・幸徳訳本で初出とみられる術語が半数を占めており、2.2 節で記述の通り、この種の原語は訳者ら独自の認知により創出されたものが多かった。故に陳訳本で直接借用されなかったのは、訳者の陳望道からして、精確性に欠けたものと判断された可能性が高いものと考えられる。しかし、語形上の近似性からして、陳訳本への間接的な影響は大きいものとみられる。

3.3 堺・幸徳訳本と異なってる術語

二訳本の照合を通して、陳訳本の術語が語形上、底本と異なっているものは 9 語ある。しかし、これらの語形上異なる術語をさらに調べたところ、いずれも堺・幸徳訳本以外の日本の社会主義文献で使われていた。（括弧内は堺・幸徳訳本における原語）

劳动党（平民党）、无产者（平民）、有产者（紳士）、资本家（紳士）、无产阶级（平民階級）、小资本家（小紳士）、有产阶级（紳士閥/紳士階級）、资本阶级（紳士閥）、资本家阶级（紳士閥）

“有産者”“無産者”を例にみたところ、これらの原語である「紳士」、「平民」はいずれも堺・幸徳訳本で初出とみられる術語であり¹⁰⁾、それぞれ“Bourgeois”“Proletarian”の訳語

として転用されていた。一方、陳訳本で使われてる“有産者”“無産者”に関しては、いずれも堺・幸徳訳本より後に創出された和製漢字語の術語であり、本稿の調査によれば、1917年ロシア十月革命前後に出版された河上肇氏の著作物において、この2語は互いに対立関係を表す術語として使われていた。

今私は、此宣言書中、彼の歴史観が包含されて居る部分の主なあるものを、若干左に抄録するであろう。主として茲に関係のあるのは、第一節「有産者と無産者」と題する部分であるが、其冒頭は次の文句で始まる。

河上肇 (1919) p30

陳望道は日本での留学期間中に河上肇をはじめとする社会主義者と知り合い、彼らの著作物に目を通しながら、マルクス主義の研究を行っていた。この点からして、陳訳本では“Bourgeois”、“Proletarian”の概念を翻訳した際に、原語の「紳士」、「平民」を直接借用せず、「有産者」、「無産者」を用いたのも、河上肇の著作物からの影響によるものと考えられる。

有産者就是有财产的人、资本家、财主、原文 Bourgeois

陳望道訳 (1920) p2

全般的にみて、これらの9語の原語はいずれも堺・幸徳訳本で初出とみられる術語であり、先述の通り、この種の原語は訳者の堺ら独自の理解により創られた術語であった。故に、堺・幸徳訳本を底本とした『宣言』中国語訳プロセスにおいて、訳者の陳望道から精確性の欠けた訳語と判断された可能性が高く、その他の日本の社会主義文献で用いられてる術語を借用して翻訳したと考えられる。

むすび

日本語におけるマルクス主義術語は、堺・幸徳訳本が刊行されるまでに基本的に生成されていた。しかし、学者らの認知により、術語は各文献ごとに差異があった。堺・幸徳訳本は独自の術語が使われていた。

陳訳本は堺・幸徳訳本を底本に翻訳されたものあり、術語の使用においても、堺・幸徳訳本からの影響が極めて大きいものであった。その影響は直接的なものと、間接的なもの分けられ、即ち底本からの術語の受け継ぎと原語をベースとした術語の改造であり、日本の早期の社会主義文献で生成され、尚且つ堺・幸徳訳本で受け継がれた術語ほど、中国語訳への直

接的な影響が大きく、堺・幸徳訳本独自の術語ほど、中国語訳への間接的な影響が大きいものであった。一方、陳訳本の訳者は中国の早期共産主義者であり、日本留学時に日本の社会主義関連文献に接触したことがあり、そこから受け継いだ術語もある。陳訳本から、日本のマルクス主義術語が中国語訳へ与えた影響がみられた。

注釈

- 1) 加藤弘之講述『真政大意』（1870）、『明治文化全集』第5巻・上、日本評論社（1994）、p102。
- 2) 西周講述『百学連環』第2篇・下（1872）、大久保利謙編『西周全集』第4巻、宗高書房（1966）p247。
- 3) 飯田鼎「自由民権思想における福沢諭吉と加藤弘之」、『三田学会雑誌』第95巻3号（2002）、p25（481）。
- 4) マルクス主義術語の弁別に関しては、宮川実編『マルクス経済学辞典』（1965）、的場昭弘等編『新マルクス学事典』（2000）、村上隆夫訳『マルクス事典』（2002）等のマルクス関連の辞書・事典の見出し語を参照。
- 5) 朱京偉<馬克思主義文献的早期日訳及其訳詞>、《語義的文化変遷》武漢大学出版社（2007）、p411。
- 6) 堺・幸徳訳本では、『宣言』第一章の題名「紳士と平民」に訳注が加えられており、「然れども吾人は種々を推敲を費したる後、姑く之を紳士と訳す。紳士とは元来君子人を意味するの語なれども、近来日本に於ける紳士紳商と云ふが如き用法に従へば、私利的にして俗悪なる、一般上流社会の人物を表現するの語として、其の頗る適切なるを見るに非ずや」と解釈されていた（堺利彦・幸徳秋水訳「共産党宣言」、『社会主義研究』第1号（1906）、p6）。
- 7) 堺・幸徳訳本では合計150語が使われてるのに対し、陳訳本では合計155語となっているが、これは堺・幸徳訳本で使われてる1語に対し、陳訳本では複数の語を以て対訳されているからである。
- 8) 本稿の2.1を参照。
- 9) 本稿の2.2節を参照。
- 10) 本稿の2.2を参照。

参考文献

- ウールセイ 著、宋戸義知訳『古今社会党沿革説』（1882）弘令社出版局
- 石谷斎蔵『社会党瑣聞』（1891）出版機関不明
- 深井英五『現時之社会主義』（1893）民友社
- 田島錦治『日本現時之社会問題』（1897）東華堂
- 村井知至『社会主義』（1899）労働新聞社
- 福井準造『近世社会主義』（1899）有斐館
- 久松義典『最近国家主義』（1900）文学同志会
- 西川光次郎『カール・マルクス』（1902）中庸堂書店
- Werner Sombart 著、神戸正雄訳『十九世紀に於ける社會主義及び社會的運動』（1903）日本経済社
- 堺利彦・幸徳秋水訳「共産党宣言」、『社会主義研究』第1号（1906）
- 河上肇「マルクスの社会主義の理論的体系（二）」、『社会問題研究』第2冊，弘文堂書房（1919）
- 陳望道訳《共産党宣言》（1920），社会主義研究社
- 堺利彦『「共産党宣言」日本訳の話』、『労農』第4巻第2号（1930）
- 堺利彦『日本社会主義運動史』（1954）河出書房
- 山本健太郎「日本マルクス主義-この発展の歴史と文献」、『思想』第7期（1956）
- 渡部義通、塩田庄兵衛編『日本社会主義文献解説－明治維新から太平洋戦争まで－』（1958）大月書店
- 岸本英太郎、小山弘健『日本近代社会思想史』（1959）青木書店
- 宮川実『マルクス経済学辞典』（1965）青木書店
- 大久保利謙編『西周全集』第4巻（1966）宗高書房（1966）
- 守屋典郎『日本マルクス主義の歴史と反省』（1980）合同出版
- 糸屋寿雄『日本社会主義運動思想史』（1980）法政大学出版局
- 宮島達夫「「共産党宣言」の訳語」、『言語の研究』むぎ書房（1979）
- 石川禎浩「陳望道訳『共産党宣言』について」、『飄風』第27号（1992）
- 『明治文化全集』第5巻・上（1994）日本評論社
- 的場昭弘・石塚正英、内田弘、柴田隆行『新マルクス学事典』（2000）弘文堂
- テレル・カーヴェー著、村上隆夫訳『マルクス事典』（2002）未來社

- 飯田鼎「自由民権思想における福沢諭吉と加藤弘之」,『三田学会雑誌』第 95 卷 3 号(2002)
- 朱京偉<馬克思主義文献の早期日訳及其訳詞>,《語義的文化変遷》武漢大学出版社(2007)
- 陳力衛著、笹野ゆり訳『『共産党宣言』の翻訳の問題—版本の変遷から見た訳語の先鋭化について』,『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 49 号八朔社(2008)
- 大村泉「日中両国における『共産党宣言』の受容＝翻訳史概観」,『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 49 号八朔社(2008)
- 玉岡敦「日本における『共産党宣言』の翻訳と訳語の変遷—1904 年から 1925 年まで—」,『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 49 号八朔社(2008)
- 大村泉「幸徳秋水・堺利彦訳『共産党宣言』の成立、伝承と中国語訳への影響」,『大原社会問題研究所雑誌』第 603 号法政大学大原社会問題研究所(2009)
- 玉岡敦『『共産党宣言』邦訳史における幸徳秋水・堺利彦訳(1904、1906)の位置』,『大原社会問題研究所雑誌』第 603 号法政大学大原社会問題研究所(2009)
- 玉岡敦『『共産党宣言』邦訳史』,『経済学史大会』第 75 回(2011)
- 玉岡敦「日本語版『共産党宣言』における翻訳術語の変遷」,『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 53 号八朔社(2012)

データベース

国立国会図書館デジタルコレクション：

(<http://dl.ndl.go.jp/>)

読売新聞社『読売新聞記事データベース「ヨミダス」』(1874-現今)：

(<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>)

朝日新聞社『朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱ」』(1879-1999)：

(<http://database.asahi.com/index.shtml>)

日本国立国語研究所『近代日本語歴史コーパス』(明治・大正時代編)：

(http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html)

基金項目：

本稿は遼寧省社会科学規劃基金項目“基於近代語料庫の日訳馬克思主義術語在漢語中傳播研究”(L23CYY004)による成果の一部を含んでいる。(本文为辽宁省社会科学规划基金项目“基于近代语料库的日译马克思主义术语在汉语中传播研究”(L23CYY004)的阶段性成果)

